

竹青

——新曲聊齋志異——

太宰治

書名：太宰治全集 6

作者：太宰治

出版者：筑摩書房

出版時間：1989/03

來源網址：http://www.aozora.gr.jp/cards/000035/files/1047_20130.html

むかし湖南^{こなん}の何とやら郡^{ぐん}邑^{ゆう}に、魚容^{ぎよう}という名の貧書生^{うじ}がいた。どういうわけか、昔から書生は貧^{いや}という事にきまっているようである。この魚容君など、氏^{うじ}育ち共に賤しくなく、眉目清秀、容姿また閑雅^{かんが おもむ}の趣^{おもしろ}きがあつて、書を好むこと色^{いろ}を好むが如しとは言えないまでも、とにかく幼少の頃より神妙に学に志して、これぞという道にはずれた振舞いも無かった人であるが、どういうわけか、福運^{ふくうん}には恵まれなかった。早く父母に死別し、親戚^{しんせき}の家を転々して育て、自分の財産^{ざいせき}というものも、その間に綺麗さっぱり無くなつていて、いまは親戚一同から厄^や介^{けい}者の扱いを受け、ひとりの酒^{さけ}くらの伯父^{おじ}が、酔余^{すいよ}の興にその家の色黒く痩せこけた無学の下婢^{かひ}をこの魚容に押しつけ、結婚せよ、よい縁だ、と傍若無人に勝手にきめて、魚容は大いに迷惑ではあつたが、この伯父もまた育ての親^いのひとりであつて、謂わば海山の大恩人に違ひないのであるから、その酔漢^{こら}の無礼な思ひつきに対して怒る事も出来ず、涙を泳え、うつろな気持で自分より二つ年上のその痩せてひからびた醜^{みにく}い女をめぐつたのである。女は酒^{さけ}くらの伯父^{めかけ}の妾^{うわさ}であつたという噂もあり、顔も醜^{みにく}いが、心もあまり結構でなかつた。魚容の学問を頭から軽蔑して、魚容が「大学の道は至善^{とどま}に止るに在り」などと口ずさむのを聞いて、ふんと鼻で笑い、「そんな至善^あなんてものに止るよりは、お金に止つて、おいしい御馳走^{ごちそう}に止る工夫でもする事だ」とにくにくしげに言つて、「あなた、すみませんが、これをみな洗濯して下さいな。少しは家事の手助けもするものです」と魚容の顔をめぐがけて女のよごれ物を投げつける。魚容はそのよごれ物をかかえて裏の河原におもむき、「馬嘶^{いななき}て白日暮れ、劍鳴て秋氣来る」と小声で吟じ、さて、何の面白い事もなく、わが故土にいながらも天涯^{こかく}の孤客^{びよう}の如く、心は渺^{むな}として空しく河上を徘徊^{はいかい}するという間の抜けた有様であつた。

「いつまでもこのような惨めな暮らしを続けていては、わが立派な祖先に対しても申しわけが無い。乃公もそろそろ三十、而立の秋だ。よし、ここは、一奮発して、大いなる声名を得なければならぬ」と決意して、まず女房を一つ殴って家を飛び出し、満々たる自信を以て郷試に応じたが、如何にせん永い貧乏暮らしのために腹中に力無く、しどろもどろの答案しか書けなかったので、見事に落第。とぼとぼと、また故郷のあばら屋に帰る途中の、悲しさは比類が無い。おまけに腹がへって、どうにも足がすすまなくなって、洞庭湖畔の呉王廟の廊下には這い上って、ごろりと仰向に寝ころび、「あああ、この世とは、ただ人を無意味に苦しめるだけのところだ。乃公の如きは幼少の頃より、もっぱら其の独りを慎んで古聖賢の道を究め、学んで而して時に之を習っても、遠方から福音の訪れ来る気配はさらに無く、毎日毎日、忍び難い侮辱ばかり受けて、大勇猛心を起して郷試に応じても無慙の失敗をするし、この世には鉄面皮の悪人ばかり栄えて、乃公の如き気の弱い貧書生は永遠の敗者として嘲笑せられるだけのものか。女房をぶん殴って颯爽と家を出たところまではよかったが、試験に落第して帰ったのでは、どんなに強く女房に罵倒せられるかわからない。ああ、いっそ死にたい」と極度の疲労のため精神朦朧となり、君子の道を学んだ者にも似合わず、しきりに世を呪い、わが身の不幸を嘆いて、薄目をあいて空飛ぶ鳥の大群を見上げ、「からすには、貧富が無くて、仕合せだなあ。」と小声で言って、眼を閉じた。

この湖畔の呉王廟は、三国時代の呉の將軍甘寧を呉王と尊称し、之を水路の守護神としてあがめ祀っているもので、靈顯すこぶるあらたかの由、湖上往来の舟がこの廟前を過ぐる時には、舟子ども必ず礼拝し、廟の傍の林には数百の鳥が棲息していて、舟を見つけると一斉に飛び立ち、啞々とやかましく噪いで舟の帆柱に戯れ舞い、舟子どもは之を王の使いの鳥として敬愛し、羊の肉片など投げてやるとさっと飛んで来て口に咥え、千に一つも受け損ずる事はない。落第書生の魚容は、この使い鳥の群が、嬉々として大空を飛び廻っている様をうらやましがり、鳥は仕合せだなあ、と哀れな細い声で呟いて眠るともなく、うとうとしたが、その時、「もし、もし。」と黒衣の男にゆり起されたのである。

魚容は未だ夢心地で、
「ああ、すみません。叱らないで下さい。あやしい者ではありません。もう少しここに寝かせて置いて下さい。どうか、叱らないで下さい。」と小さい時からただ人に叱られて育って来たので、人を見ると自分を叱るのではないかと怯える卑屈な癖が身についていて、この時も、讒言のように「すみません」を連発しな

がら寝返りを打って、また眼をつぶる。

「叱るのではない。」とその黒衣の男は、不思議な^{しわが}嘎れたる声で言って、
「呉王さまのお言いつけだ。そんなに人の世がいやになって、からすの生涯が
うらやましかったら、ちょうどよい。いま黒衣隊が一卒欠けているから、その
補充にお前を採用してあげるといってお言葉だ。早くこの黒衣を着なさい。」ふわ
りと薄い黒衣を、寝ている魚容にかぶせた。

^{おす}たちまち、魚容は雄の烏。眼をぱちぱちさせて起き上り、ちゃんと廊下の
^{らんかん}欄干にとまって、^{くちばし}嘴で羽をかいつくろい、翼をひろげて危げに飛び立ち、い
ましも斜陽を一ぱい帆に浴びて湖畔を通る舟の上に、むらがり噪いで肉片の
^{きょうおう}饗応にあずかっている数百の神鳥にまじって、右往左往し、舟子の投げ上げ
^{じょうず}る肉片を上手に嘴に受けて、すぐにもう、生れてはじめてと思われるほどの満
^{こずえ}腹感を覚え、岸の林に引上げて来て、梢にとまり、林に嘴をこすって、水満々
^{ひるがえ}の洞庭の湖面の夕日に映えて黄金色に輝いている様を見渡し、「秋風 翻す
^{いわゆる}黄金浪花千片か」などと所^{えん}謂君子蕩々然^{めす}とうそぶいていると、

「あなた、」と艶なる女性の声^{えん}がして、「お気に召^{めす}しまして？」

見ると、自分と同じ枝に雌の烏が一羽とまっている。

「おそれいます。」魚容は一揖して、^{いちゆう}「何せどうも、身は軽^{でいし}くして泥滓を離
れたのですからなあ。叱らないで下さいよ。」とつい口癖になっているので、余
計な一言を附加えた。

「存じて居ります。」と雌の烏は落ちついて、「ずいぶんいままで、御苦勞を
なさいましたそうですからね。お察し申しますわ。でも、もう、これからは大丈
夫。あたしがついていきますわ。」

「失礼ですが、あなたは、どなたです。」

「あら、あたしは、ただ、あなたのお傍に。どんな用でも言いつけて下さいま
し。あたしは、何でも致します。そう思っ^{ろうばい}ていらして下さい。おいや？」

「いやじゃないが、」魚容は狼^{おれ}狽して、「乃公にはちゃんと女房があります。
浮気は君子の慎しむところです。あなたは、乃公を邪道に誘惑しようとしてい
る。」と無理に分別顔を装うて言った。

「ひどいわ。あたしが軽はずみの好色の念からあなたに言い寄ったとでもお思
いの？ ひどいわ。これはみな呉王さまの情深いお取りはからいですわ。あ
なたをお慰め申すように、あたしは呉王さまから言いつかったのよ。あなたはも
う、人間でないのですから、人間界の奥さんの事なんか忘れてしまってもいい
のよ。あなたの奥さんはずいぶんお優しいお方かも知れないけれど、あたしだ
ってそれに負けずに、一生懸命あなたのお世話をしますわ。烏の操は、人間
^{みさお}の操よりも、もっと正しいという事をお見せしてあげますから、おいやでしょうけ
れど、これから、あたしをお傍に置いて下さいな。あたしの名前は、竹青という
の。」

魚容は情に感じて、

「^あありがとう。乃公も実は人間界でさんざんの目に遭って来ているので、どうも疑い深くなって、あなたの御親切も素直に受取る事が出来なかったのです。ごめんなさい。」

「あら、そんなに改まった言い方をしては、おかしいわ。きょうから、あたしはあなたの召使いじゃないの。それでは旦那様、ちょっと食後の御散歩は、いかがでしょう。」

「うむ、」と魚容もいまは鷹揚にうなずき、「案内たのむ。」

「それでは、ついていらっしやい。」とぽつと飛び立つ。

秋風^{じょうじょう}嫋々^なと翼^{えんぱ}を撫で、洞庭の烟波眼下にあり、はるかに望めば岳陽の
 いらか^{しかくらん} 薨、灼^{しやく}爛と落日に燃え、さらに眼を転ずれば、君山、玉鏡に可憐^{かれん}一点の
 すいたい 翠^{すい}黛を描いて湘君の^{しょうくん} 倂^{おもかげ}をしのばしめ、黒衣の新夫婦は啞々と鳴きかわして
 うれ おそ ひしゅう
 先になり後になり憂えず惑わず懼れず心のままに飛翔して、疲れると帰帆の
 しょうじょう ほほえ
 檣^{こう}上にならんで止って翼を休め、顔を見合わせて微笑み、やがて日が暮れる
^{こうこう}と洞庭秋月皎々たるを賞しながら飄然と埒に帰り、互に羽をすり寄せて眠り、
^{すす}朝になると二羽そろって洞庭の湖水でぱちやぱちやとからだを洗い口を嗽ぎ、岸
 に近づく舟^うをめがけて飛び立てば、舟子どもから朝食の奉納があり、新婦の竹
 青は初い初いしく恥じらいながら影の形に添う如くいつも傍にあって何かと優しく
 世話を焼き、落第書生の魚容も、その半生の不幸をここで一ぺんに吹き飛ばした
 ような思いであった。

その日の午後、いまは全く呉王廟の神鳥の一羽になりすまして、往来の舟の
 帆檣にたわむれ、折から兵士を満載した大舟が通り、仲間の鳥どもは、あれは
 危いと逃げて、竹青もけたたましく鳴いて警告したのだけれども、魚容の神鳥は
 何せ自由に飛翔できるのがうれしくてたまらず、得意げにその兵士の舟の上を
^{せんかい}旋回^こしていたら、ひとりのいたずらっ児の兵士が、ひょうと矢を射てあやまたず
^{いはずま}魚容の胸をつらぬき、石のように落下する間一髪、竹青、稲妻の如く迅速に
^{くわ さつ}飛んで来て魚容の翼を咥え、颯と引上げて、呉王廟の廊下に、瀕死の魚容を
^{かいがい かいほう}寝かせ、涙を流しながら甲斐甲斐しく介抱した。けれども、かなりの重傷で、
 とても助からぬと見て竹青は、一声悲しく高く鳴いて数百羽の仲間の鳥を集め、
^{ものすご}羽^{あお}ばたきの音も物凄く一斉に飛び立ってかの舟を襲い、羽で湖面を煽って大浪
^{たちま てんぷく}を起し忽ち舟を顛覆させて見事に報讐^{ほうしゅう}し、大鳥群は全湖面を震撼^{しんかん}させるほど
^{がいか}の騒然たる凱歌^{もと}を挙げた。竹青はいそいで魚容の許に引返し、その嘴を魚容
 の頬にすり寄せて、

「聞えますか。あの、仲間の凱歌が聞えますか。」と哀慟^{あいどう}して言う。

魚容は傷の苦しさにもはや息も絶える思いで、見えぬ眼をわずかに開い

て、

「竹青。」と小声で呼んだ、と思ったら、ふと眼が醒^さめて、気がつくとは自分は人間の、しかも昔のままの貧書生の姿で呉王廟の廊下に寝ている。斜陽あか^{かえで}あかと目の前の楓の林を照らして、そこには数百の鳥が無心に唾々と鳴いて遊んでいる。

「気がつきましたか。」と農夫の身なりをした爺^{じい}が傍に立っていて笑いながら尋ねる。

「あなたは、どなたです。」

「わしはこの辺の百姓だが、きのうの夕方ここを通ったら、お前さんが死んだように深く眠っていて、眠りながら時々微笑んだりして、わしは、ずいぶん大声を挙げてお前さんと呼んでも一向に眼を醒まさない。肩をつかんでゆすぶっても、ぐたりとしている。家へ帰ってから気になるので、たびたびお前さんの様子を見に来て、眼の醒めるのを待っていたのだ。見れば、顔色もよくないが、どこか病気か。」

「いいえ、病気ではございません。」不思議におなかも今はちっとも空いていない。「すみませんでした。」とれいのあやまり癖が出て、坐り直して農夫に^すていねい^す丁寧にお辞儀をして、「お恥かしい話ですが、」と前置きをしてこの廟の廊下に行倒れるにいたった事情を正直に打明け、重ねて、「すみませんでした。」とお詫びを言った。

農夫は憐れに思った様子で、^{あわ}懐^{ふところ}から財布^{さいふ}を取出しいくらかの金を与え、^{さいおう}「人間万事塞翁^{はか}の馬。元気を出して、再挙^{はか}を図るさ。人生七十年、いろいろさ^{ほんぶく}まざまの事がある。人情は翻^{はらん}覆^{しやれ}して洞庭湖の波瀾に似たり。」と洒落た事を言って立ち去る。

魚容はまだ夢の続きを見ているような気持で、呆然^{ぼうぜん}と立って農夫を見送り、それから振りかえって楓の梢にむらがる鳥を見上げ、

「竹青！」と叫んだ。一群の鳥が驚いて飛び立ち、ひとしきりやかましく騒いで魚容の頭の上を飛びまわり、それからまっすぐに湖の方へいそいで行って、それっきり、何の変った事も無い。

やっぱり、夢だったかなあ、と魚容は悲しげな顔をして首を振り、一つ大きい^{ためいき}溜息^{ためいき}をついて、力無く故土に向けて発足する。

故郷の人たちは、魚容が帰って来ても、格別うれしそうな顔もせず、冷酷の女房は、さっそく伯父の家の庭石の運搬を魚容に命じ、魚容は汗だくになって河原から大いなる岩石をいくつも伯父の庭先まで押したり曳^ひいたり担^{かつ}いだりして運び、^{えん}「貧^{えん}して怨無きは難し」とつくづく嘆じ、^{あした}「朝に竹青^{ゆうべ}の声を聞かば夕に^{はげ}死するも可なり矣」と何につけても洞庭一日の幸福な生活が燃えるほど劇しく懷慕せられるのである。

伯夷叔齊は旧惡を念わず、怨^{こうまい}是を用いて希なり。わが魚容君もまた、君子の道に志している高邁^{こうまい}の書生であるから、不人情の親戚をも努めて憎まず、無学の老妻にも逆わず、ひたすら古書に親しみ、閑雅の清趣を養っていたが、それでも、さすがに身の者から受ける蔑視^{べっし}には堪えかねる事があって、それから三年目の春、またもや女房をぶん殴って、いまに見ろ、と青雲の志^{いだ}を抱いて家出して試験に応じ、やっぱり見事に落第した。よっぽど出来ない人だったと見える。帰途、また思い出の洞庭湖畔、呉王廟に立ち寄って、見るものみな懐しく、悲しみもまた千倍して、おいおい声を放って廟前で泣き、それから懐中のわずかな金を全部はたいて羊肉^まを買い、それを廟前にばら撒いて神鳥に供して樹上から降りて肉^{つえば}を啄む群鳥を眺めて、この中に竹青もいるのだろなあ、と思っても、皆一様に真黒で、それこそ雌雄をさえ見わけの事が出来ず、「竹青はどれですか。」と尋ねても振りかえる鳥は一羽も無く、みんなただ無心に肉を拾ってたべている。魚容はそれでも諦められず、「この中に、竹青がいたら一番あとまで残っておいで。」と、千万の思慕の情をこめて言ってみた。そろそろ肉が無くなって、群鳥は二羽立ち、五羽立ち、むらむらぱつと大部分飛び立ち、あとには三羽、まだ肉を捜して居残り、魚容はそれを見て胸をとどろかせ手に汗を握ったが、肉がもう全く無いと見てぱつと未練^{みれん}げもなく、その三羽も飛び立つ。魚容は気抜けの余りくらくら眩暈^{めまい}して、それでも尚^{なお}、この場所から立ち去る事が出来ず、廟の廊下に腰をおろして、春霞に煙る湖面を眺めてただやたらに溜息をつき、「ええ、二度も続けて落第して、何の面目があつておめおめ故郷に帰られよう。生きて甲斐ない身の上だ、むかし春秋戦国の世にかの屈^{くつげん}原も衆人皆酔い、我^{ひと}独り醒めたり、と叫んでこの湖に身を投げて死んだとかいう話を聞いている、乃公もこの思い出なつかしい洞庭^{おれ}に身を投げて死ねば、或いは竹青がどこかで見ていて涙を流してくれるかも知れない、乃公を本当に愛してくれたのは、あの竹青だけだ、あとは皆^{いい}、おそろしい我慾の鬼ばかりだった、人間万事塞翁の馬だと三年前にあのお爺さんが言^たってはげましてくれたけれども、あれは嘘だ、不仕合せに生れついた者は、いつまで経っても不仕合せのどん底であがいているばかりだ、これすなわち天命を知るという事か、あはは、死のう、竹青が泣いてくれたら、それでよい、他に何も望みは無い」と、古聖賢の道を究めた筈の魚容も失意の憂愁に堪えかね、今夜はこの湖で死ぬる覚悟。やがて夜になると、輪郭^{りんかく}の滲んだ満月が中空に浮び、洞庭湖はただ白く茫^{ぼう}として空と水の境が無く、岸の平沙は昼のように明^{もや}るく柳の枝は湖水の靄を含んで重く垂れ、遠くに見える桃畑^{ぼんだ}の万朶の花は霰に似て、微風が時折、天地の溜息の如く通過し、いかにも静かな春の良

夜、これがこの世の見おさめと思えば涙も袖にあまり、どこからともなく夜猿の悲しそうな鳴声が聞えて来て、愁思まさに絶頂に達した時、背後にはたはたと翼の音がして、

つつが
「別来、恙無きや。」

振り向いて見ると、月光を浴びて明眸皓齒、二十ばかりの麗人がにっこり笑っている。

「どなたです、すみません。」とにかく、あやまった。

「いやよ、」と軽く魚容の肩を打ち、「竹青をお忘れになったの？」

「竹青！」

魚容は仰天して立ち上り、それから少し躊躇したが、ええ、ままよ、といきなり美女の細い肩を掻き抱いた。

「離して。いきが、とまるわよ。」と竹青は笑いながら言って巧みに魚容の腕からのがれ、「あたしは、どこへも行かないわよ。もう、一生あなたのお傍に。」

「たのむ！　そうしておくれ。お前がいないので、乃公は今夜この湖に身を投げて死んでしまうつもりだった。お前は、いったい、どこにいたのだ。」

「あたしは遠い漢陽に。あなたと別れてからここを立ち退き、いまは漢水の神鳥になっているのです。さっき、この呉王廟にいる昔のお友達があなたのお見えになっている事を知らせにいらして下さったので、あたしは、漢陽からいそいで飛んで来たのです。あなたの好きな竹青が、ちゃんとこうして来たのですから、もう、死ぬなんておそろしい事をお考えになっては、いやよ。ちょっと、あなたも痩せたわねえ。」

「痩せる筈さ。二度も続けて落第しちゃったんだ。故郷に帰れば、またどんな目に遭うかわからない。つくづくこの世が、いやになった。」

「あなたは、ご自分の故郷にだけ人生があると思ひ込んでいらっしゃるから、そんなに苦しくおなりになるのよ。人間到るところに青^{いた}山^{せいざん}があるとか書生さんたちがよく歌っているじゃありませんか。いちど、あたしと一緒に漢陽の家へいらっしゃい。生きているのも、いい事だと、きっとお思いになりますから。」

「漢陽は、遠いなあ。」いずれが誘うともなく二人ならんで廟の廊下から出て月下の湖畔を逍遙しながら、「父母在せば遠く遊ばず、遊ぶに必ず方有り、というからねえ。」魚容は、もっともらしい顔をして、れいの如くその学徳の片鱗を示した。

「何をおっしゃるの。あなたには、お父さんもお母さんも無いくせに。」

「なんだ、知っているのか。しかし、故郷には父母同様の親戚の者たちが多勢いる。乃公は何とかして、あの人たちに、乃公の立派に出世した姿をいちど見せてやりたい。あの人たちは昔から乃公をまるで阿呆か何かみたいにしてるのだ。そうだ、漢陽へ行くよりは、これからお前と一緒に故郷に帰り、お前の綺麗な顔をみんなに見せて、おどろかしてやりたい。ね、そうしようよ。乃

公は、故郷の親戚の者たちの前で、いちど、思いきり、大いに威張ってみたいのだ。故郷の者たちに尊敬されるという事は、人間の最高の幸福で、また終極の勝利だ。」

「どうしてそんなに故郷の人たちの思惑ばかり気にするのでしょうか。むやみに故郷の人たちの尊敬を得たくて努めている人を、郷原^{きょうげん}というんじゃないかったかしら。郷原は徳の賊なりと論語に書いてあったわね。」

魚容は、ぎゃふんとまいって、やぶれかぶれになり、

「よし、行こう。漢陽に行こう。連れて行ってくれ。逝^{ゆく}者は斯^{かく}の如^{かな}き夫、昼夜^{あざけ}を捨てず。」てれ隠しに、甚^{はなは}だ唐突な詩句を誦して、あははは、と自らを嘲った。

「まいりますか。」竹青はいそいそして、「ああ、うれしい。漢陽の家では、あなたをお迎えしようとして、ちゃんと仕度がしてあります。ちょっと、眼をつぶって。」

魚容は言われるままに眼を軽くつぶると、はたはたと翼の音がして、それから何か自分の肩に薄い衣のようなものがかったらと思うと、すっとからだが軽くなり、眼をひらいたら、すでに二人は雌雄の鳥、月光を受けて漆黒の翼は美しく輝き、ちょんちょん平沙を歩いて、啞々と二羽、声をそろえて叫んで、ぱっと飛び立つ。

月下白光三千里の長江^{ちょうこう}、洋々と東北方に流れて、魚容は酔えるが如く、流れにしたがっておよそ二ときばかり飛翔して、ようよう夜も明けはなれて遙か前方^{はる}に水の都、漢陽の家々の麓^{いらか あさもや}が朝靄^{せいせん}の底に静かに沈んで眠っているのが見えて来た。近づくにつれて、晴川^{せいせい}歴々たり漢陽の樹、芳草萋々^{おうむ}たり鸚鵡の洲^{そび}、対岸には黄鶴楼の聳えるあり、長江をへだてて晴川閣と何か昔を語り合^{だいべつざん}い、帆影点々といそがしげに江上を往来し、更にすすめば大別山^{ふもと}の高峰眼下^{えんえん}にあり、麓には水漫々の月湖ひろがり、更に北方には漢水蜿蜒と天際に流れ、東洋のヴェニス一眸の中に収り、「わが郷関^{ぼう}何れの処ぞ是なる、煙波江上、人をして愁えしむ」と魚容は、うっとり呟いた時、竹青は振りかえって、「さあ、もう家へまいりました。」と漢水の小さな孤洲^{きょうかんいず}の上で悠然と輪を描きながら言った。魚容も真似して大きく輪を描いて飛びながら、脚下^{りよくよう}の孤洲を見る^{けむ}と、緑楊水にひたり若草烟るが如き一隅にお人形の住家みたいな可憐な美しい楼舎があつて、いましもその家の中から召使いらしき者五、六人、走り出て空を仰ぎ、手を振って魚容たちを歓迎している様が豆人形のように小さく見えた。竹青は眼で魚容に合図して、翼をすぼめ、一直線にその家めがけて降りて行き、魚容もおくれじと後を追ひ、二羽、その洲の青草原に降り立ったとたんに、二人は貴公子と麗人、にっこり笑い合つて寄り添ひ、迎えの者に囲まれながらその美しい楼舎にはいった。

竹青に手をひかれて奥の部屋へ行くと、その部屋は暗く、卓上の銀燭は
 せいえん は すいばく
 青煙を吐き、垂幕の金糸銀糸は鈍く光って、寝台には赤い小さな机が置か
 かこう
 れ、その上に美酒佳肴がならべられて、数刻前から客を待ち顔である。

「まだ、夜が明けぬのか。」魚容は間の抜けた質問を發した。

「あら、いやだわ。」と竹青は少し顔をあからめて、「暗いほうが、恥かしくな
 くていいと思って。」と小声で言った。

「君子の道は闇然たり、か。」魚容は苦笑して、つまらぬ洒落を言い、「し
 あんぜん しやれ
 かし、隠に素いて怪を行う、という言葉も古書にある。よろしく窓を開くべしだ。
 いん むか
 漢陽の春の景色を満喫しよう。」

魚容は、垂幕を排して部屋の窓を押しひらいた。朝の黄金の光が颯々と射し
 さ
 込み、庭園の桃花は、繚乱たり、鶯の百囀が耳朶をくすぐり、かなたには
 りょうらん うぐいす ひゃくてん じだ
 漢水の小波が朝日を受けて躍っている。

「ああ、いい景色だ。くにの女房にも、いちど見せたいなあ。」魚容は思わず
 がくぜん
 そう言ってしまうと、愕然とした。乃公は未だあの醜い女房を愛しているの
 か、とわが胸に尋ねた。そうして、急になぜだか、泣きなくなった。

「やっぱり、奥さんの事は、お忘れでないに見える。」竹青は傍で、しみじみ
 かす
 言い、幽かな溜息をもらした。

「いや、そんな事は無い。あれは乃公の学問を一向に敬重せず、よごれ物を
 洗濯させたり、庭石を運ばせたりしやがって、その上あれは、伯父の妾であっ
 たという評判だ。一つとして、いいところが無いのだ。」

「その、一つとしていいところの無いのが、あなたにとって尊くなつかしく思われ
 そくいん
 ているのじゃないの？ あなたの御心底は、きっと、そうなのよ。惻隱の心
 うら
 は、どんな人にもあるというじゃありませんか。奥さんを憎まず怨まず呪わず、
 一生涯、労苦をわかち合って共に暮して行くのが、やっぱり、あなたの本心の
 理想ではなかったのかしら。あなたは、すぐにお帰りなさい。」竹青は、一変
 して嚴肅な顔つきになり、きっぱりと言い放つ。

魚容は大いに狼狽して、

「それは、ひどい。あんなに乃公を誘惑して、いまさら帰れとはひどい。郷原
 だの何だのと言って乃公を攻撃して故郷を捨てさせたのは、お前じゃないか。ま
 るでお前は乃公を、なぶりものにしているようなものだ。」と抗弁した。

「あたしは神女です。」と竹青は、きらきら光る漢水の流れをまっすぐに見つめ
 たまま、更にきびしい口調で言った。「あなたは、郷試には落第いたしました
 せんぼう
 が、神の試験には及第しました。あなたが本当に鳥の身の上を羨望している
 のかどうか、よく調べてみるように、あたしは呉王廟の神様から内々に言いつけ
 きんじゅう
 られていたのです。禽獸に化して真の幸福を感じずような人間は、神に最も
 けんえん
 倦厭せられます。いちどは、こらしめのため、あなたを弓矢で傷つけて、人間

界にかえしてあげましたが、あなたは再び鳥の世界に帰る事を乞いました。神は、こんどはあなたに遠い旅をさせて、さまざまの楽しみを与え、あなたがその^し快楽に酔い痴れて全く人間の世界を忘却するかどうか、試みたのです。忘却したら、あなたに与えられる刑罰は、恐しすぎて口に出して言う事さえ出来ないほどのものです。お帰りなさい。あなたは、神の試験には見事に及第なさいました。人間は一生、人間の愛憎の中で苦しまなければならぬものです。のがれ出る事は出来ません。忍んで、努力を積むだけです。学問も結構ですが、や^{てら}たらに脱俗を銜うのは卑怯です。もっと、むきになって、この俗世間を愛惜し、愁殺し、一生そこに没頭してみてください。神は、そのような人間の姿を一ばん愛しています。ただいま召使いの者たちに、舟の仕度をさせて居ります。あれに乗って、故郷へまっすぐにお帰りなさい。さようなら。」と言い終ると、竹青^{こつぜん}の姿はもとより、楼舎も庭園も忽 然と消えて、魚容は川の中の孤洲に呆然と独り立っている。

^{かじ}帆も楫も無い丸木舟が一艘^{そう}すると岸に近寄り、魚容は吸われるようにそれに乗ると、その舟は、飄^{ひょうぜん}然と自行して漢水を下り、長江を^{さかのぼ}溯り、洞庭を横切り、魚容の故郷ちかくの漁村の岸畔に突き当たり、魚容が上陸すると無人の小舟は、またすると自^{おのずか}ら引返して行って洞庭の烟波の間に没し去った。^{すこぶ}

頗るしょげて、おっかなびっくり、わが家の裏口から薄暗い内部を覗くと、
「あら、おかえり。」と艶^{えんぜん}然と笑って出迎えたのは、ああ、驚くべし、竹青ではないか。

「やあ！ 竹青！」

「何をおっしゃるの。あなたは、まあ、どこへいらしていたの？ あたしはあなたの留守に大病して、ひどい熱を出して、誰もあたしを看病してくれる人がなくて、しみじみあなたが恋いしくなって、あたしが今まであなたを馬鹿にしていたのは本当に間違った事だったと後悔して、あなたのお帰りを、どんなにお待ちしていたかわかりません。熱がなかなかさがらなくて、そのうちに全身が紫色に腫^はれて来て、これもあなたのようないいお方を粗末にした罰で、当然の報いだとあきらめて、もう死ぬのを静かに待っていたら、腫れた皮膚が破れて青い水がどっさり出て、すつとからだが軽くなり、けさ鏡を覗いてみたら、あたしの顔は、すっかり変って、こんな綺麗な顔になっているので嬉しくて、病気も何も忘れてしまい、寢床から飛び出て、さっそく家の中のお掃除などはじめていたら、あなたのお帰りでしょう？ あたしは、うれしいわ。ゆるしてね。あたしは顔ばかりでなく、からだ全体変ったのよ。それから、心も変ったのよ。あたしは悪かったわ。でも、過去のあたしの悪事は、あの青い水と一緒にみんな流れ出てしまったのですから、あなたも昔の事は忘れて、あたしをゆるして、あなたのお傍に一生置いて下さいな。」

一年後に、玉のような美しい男子が生れた。魚容はその子に「漢産」という

名をつけた。その名の由来は最愛の女房にも明さなかった。神鳥の思い出と共に、それは魚容の胸中の尊い秘密として一生、誰にも語らず、また、れいの御自慢の「君子の道」も以後はいつさい口にせず、ただ黙々と相変らずの貧しいその日暮しを続け、親戚の者たちにはやはり一向に敬せられなかったが、格別それを気にするふうも無く、極めて平凡な一田夫として俗塵に埋もれた。

自註。これは、創作である。支那のひとたちに読んでもらいたくて書いた。漢訳せられる筈である。

底本：「太宰治全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成元）年2月28日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：山本奈津恵

2000年9月19日公開

2005年10月31日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫](http://www.aozora.gr.jp/)

[（http://www.aozora.gr.jp/）](http://www.aozora.gr.jp/)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

●表記について

- このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。